



金魚

こんな夢を見た。  
どんなもこんなもなかった。  
目が覚めて電話をした。  
不通だった。  
他に誰も夢のことを話す相手がいなかった。  
外に走り出た。  
通りの向こうにみんながいたが、渡る場所がどこにもなかった。  
ここには危険な気がした。  
誰かが追いかけてきたのであわてて逃げた。  
地下はぬかるんでいた。  
何かに足をとられて水の中に落ちた。  
水よりもねっとりした液体だった。  
顔まで沈むと鼻や口から液体が入り込んできた。  
息ができなかった。  
もがき苦しんでいるうちに川岸に打ち上げられた。  
電話が転がっていた。  
出てみると誰かが夢の話をしていた。  
自分の見た夢とそっくりだった。  
そのことを伝えようとする舌がもつれてうまく話せなかった。  
いつの間にか相手の意識に滑り込んでいた。  
覚えているうちに話さなければと、とめどなく喋り続けた。  
やがて何の話をしているのか分からなくなってしまった。  
あえぎながら目覚めると、水槽の金魚が死んでいた。  
金魚は夢を見ているのだなと思った。

小石を蹴る

こんな夢を見た。

小石を蹴飛ばしながら一人で帰り道を歩いていた。大人の体だったが、ランドセルを背負っていた。蹴った石が向こうから歩いてきた男の人に当たってしまい、ぼくはしまったと身を固くした。

その男の人はどこか変だった。よく見ると、顔が完全に左右対称なのだった。左右ともに同じ目、同じ眉、同じ耳をしていた。ぴったり真ん中で分けられた髪の毛、まったく同じ角度につり上がった口角。奇っ怪で恐ろしい顔だった。

怖くなって逃げ出すと、男の人は怒鳴り散らしながら追いかけてきた。まるで壊れたレコードみたいに同じ台詞を繰り返していた。ちらりと振り返ってみると、操り人形みたいにでたらめな走り方だった。捕まったらただでは済まなそうだった。

なんとか逃げおおせると、急に喉が乾くのを感じた。ちょうど自販機があった。さっきからポケットの中で小銭がじゃらじゃら鳴るのを感じていたところだった。

小銭を投入口に入れると、自販機は何も反応しなかった。壊れていたのだ。ぼくは気がつかないまま小銭をすべて入れてしまった。返金レバーを下げてもお金は取り出せなかった。

急によく行くカフェのお気に入りの店員さんに会いたくなかった。お店に来てみると、初めて見る店員が一人いるだけだった。彼女は自己紹介をした。ぼくにはうまく発音できない、外国風の長い名前だった。

ここに来た目的がばれないように振る舞ったが、なんとなく見透かされているような気がした。恥ずかしくなって帰ろうとすると、外国風の名前の店員は引き留めようとするかのように意味のないことをべらべらと喋り続けた。

彼女の話にあいまいにうなずきながら、ぼくはパスタが茹であがるまでの時間を気にしていた。いつの間にパスタなんか茹ではじめたのか自分でも分からなかった。茹で時間が七分のパスタだった。

結局、何も注文しないまま閉店までカフェにいた。店内を見回すといつの間にか客も店員もみんないなくなっていた。

ぼくは茹で過ぎたパスタのことを考えながら、小石を蹴飛ばして家に帰った。

ある情景

こんな夢を見た。

風がそよぐ中で、わたしは洗濯物を干している。草原にぽつりと建つ、丸太小屋のような家の庭先である。雨上がりの晴天で、地面には大きな水たまりがいくつもできている。水たまりには青空が映り、わたしはシーツを広げながら誰かの帰りを待っている――。

言葉にするとたったそれだけのことだった。

もっとずっと長い夢の気がした。長編映画ほどのストーリーがあり、その中で名状しがたい感情が複雑に絡まりあって流れていたように思えた。

それなのに、いくら思い出そうとしてもその情景以上のものは出てこなかった。

それでもそこには不思議な詩情があった。

その場面を思い描くと、草原の草木を揺らす爽やかな風を頬に感じるようだった。

誰の帰りを待っているのかも分からなかった。仮にその人が帰ってこないとしても、かまわないのだろうと思った。

華々しき生涯

こんな夢を見た。

街の中を歩いている。目的は自分でも分からないが、今自分は夢を見ているのだということは分かっている。

停留所に停まっていたバスに乗る。乗客は他に誰もおらず、運転手もいない。仕方なく、自分で運転することにする。

バスはデパートの店内を走る。什器をなぎ倒し、ガラスを突き破り、やがて階段口に突っ込んで止まる。

バスから降りて自分が破壊した道を振り返ると、どこか誇らしい気持ちにすらなる。救急隊が駆けつけて現場はえらい騒ぎになる。

「あなたの仕業ですね」

救急隊員に問い詰められるが、違うと首を横に振る。相手はそれを信じて立ち去るが、ぶんぶん振っていた首がそのまま止まらなくなってしまう。

そのうち首がくるくる回転しはじめる。やがて、ネジが外れるように体からすっぽり抜けてしまう。

首から上だけの姿になって街をさ迷う。目的は何もないが、夢を見ているのだということ分かっている。

本物のバスの運転が、自分のバスを知らないかと言って人に尋ねて回っているのを滑稽な思いで見送る。

ふいに虫取り網を持った少年たちが現れ、自分を捕まえようとする。少年たちは捕まえたなら懸賞金をもらえるのだと言って必死に追いかけてくる。

何本もの網が伸びてくるのをかわして、道端に転がり落ちる。そこへ舗装工事をしてきたローラー車が来て、危うく轢かれそうになる。

首から下だけの体が、頭はどこだ頭はどこだと手探りでふらふらやってくる。

こっちへ来いと呼び寄せるが、向こうは目も耳もないのでなかなか方向が定まらない。なんとか近くまで誘導したのはいいが、掴み上げられるよりも前に足先で蹴飛ばされてしまう。そうやって何度も蹴飛ばされて目が回る。

ちょうど蹴り出されたところにまたしてもローラー車が来る。今度はペしゃんこに轢かれてしまう。

「あら、こんなところにちょうどいいものが」

厚化粧の婦人が、ペしゃんこになった自分を見つけてくるくる丸めて家に持ち帰る。

自分は、その婦人の家のリビングでマット代わりにされる。掃除機をかけられたり、猫に糞尿をかけられたり、熱いコーヒーをこぼされたり、天日干しされたりしながら、残りの生涯を波瀾万丈に過ごす。

夢の記憶

こんな夢を見た。

ある男が同僚を訪ねて一緒に酒を飲む。最初こそ楽しくやっているが、男が共通の知り合いである女性の話を持ち出すと雰囲気はいきなり険悪になる。

その女性とは男の元恋人であり、今ではその同僚と付き合っているのだ。

男は挑発的な言葉を投げつけ、ねちねちと同僚をなじる。最初は耳を貸さない同僚だが、男が恋人の品性を貶めるようなことを言うと思わず手が出てしまう。

男はそれをきっかけにしてポケットに忍ばせていたナイフを取り出す。相手が先に手を出すのを待っていたかのようなのである。

男は自分でも何をするつもりなのか分かっていない。気がつくやうに血だらけのナイフを握って立っている。傍らには大量の血を流して倒れる同僚の死体がある。

それが近頃よく見る夢だった。

夢に登場する人々が誰なのかは分からなかった。

わたしは連日警察に話を聞かれていた。職場の同僚が殺されるという痛ましい事件が起き、不本意ながら容疑者になっていたのだ。

殺された同僚は、単なる仕事仲間ではなく友人だった。間違ってもそんなことをするはずがなかった。

彼が殺された日にどこで何をしていたのか、警察は何度もしつこく問い質した。

わたしには答えられなかった。その日のことが記憶からすっぽり抜け落ちてしまっていたのだ。どれだけがんばってみても思い出せなかった。

散々尋問され、疲れ果てて眠るとまた同じ夢を見た。

登場する二人の人物は顔がはっきり分からなかった。二人が話題にする女性についても同じだった。むしろ夢に見るたびに輪郭がぼやけていくようだった。

いずれにしても、訊かれていることとは何の関係もないと思った。

だから警察には夢の話はしなかった。

綱渡り

こんな夢を見た。

溪谷に渡したロープの上を歩いていた。

向かう先は霞んで見えず、もと来た方も遥か地平線の彼方に消えていた。ときどき谷底から強い風が吹きつけてきた。命綱もつけてなかった。

とにかく前に進むしかなかった。

足は震え、一メートル進むのにも体力を消耗した。時間もかかった。いくら行っても向こうの先は見えそうになかった。

遠くに鳥が見えた。鳥は真っすぐこちらに飛んできた。

鳥ではなく、ドローンだった。

「郵便です」

搭載されている音声アプリが喋った。

機体にぶら下がった袋から葉書を一枚取り出した。「あと少し。がんばれ」と書いてあった。

顔をあげて前を見た。全然あと少しではなかった。